

れない断腸の思いでした。

一月遅れで、三男を胸に抱いてコロ島から船に乗り込み、佐世保港に上陸しました。三男は栄養失調のため三歳になっても歩けない状態でした。船の中で死者が出るたびに水葬をしました。三男がいつ、このようになるかと思うとまたまた心がかきむしられる思いで、わが子を必死に勇気づけ励ましつづけ、日本の上陸が現実となった時の嬉しさは、いうに及ばないものがあります。

帰郷後、私は市職員に採用していただき、次男も三男も現在は立派に社会人となりました。昭和五十一年三月末に私は市役所を退職し、長年の仕事にピリオドを打ち少しのんびりしようと思っていた矢先に、昭和五十二年一月脳血栓のため病床に伏し、家族や周囲の人々の看護のおかげで一命を取り止め、病後は三男の家族と共に生活しております。平和こそ幸せの基本だと思つて、時々通院しておりますが、朝夕の散歩を日課として暮しております。

## 母の終戦から引揚後の辛酸労苦の 一生を省みて

北海道 佐藤 康子

昭和十四年、父佐藤軍治の兄である喜作が満州である事業をしているので来ないかと言うので、北海道の長沼町で農業をしていた父が長沼町をあとに、満州に一家が移住して、兄と共同で事業を始めた。

七、八人の満人を雇い、母は一生の中で一番良い月日を送っていたのではないかと思う。やがて戦争が始まりそのため事業も思わしくなくなって来て、父は満鉄に入社し北海道出身の白井三好さんと友人になった。

昭和二十年八月になり戦争は激しさを増し、満鉄から女子供、老人に引揚げの指令があり、母は十一歳の長男、七歳の次女、四歳の次男、二歳の三女（私）生れたばかりの三男を連れて、引揚列車に乗った。その

頃父は赤紙で召集されていなかった。

引揚者は夜だけ走る貨物車を乗り継ぎ々々四人の子供を連れた母の労苦は大変なものだったと思う。

その引揚げの途中次男と三男は腸チフスにかかり高熱を出し、医者は勿論のこと薬を与えることもできず、ただ死んでゆくのを見守るしかなかったのです。

小さなく木箱に骨を納め、ようやく船に乗れる直前に頼りにしていた長男までも同様亡くなってしまい、悲しいとか辛いとか思っている暇もなく、三人の木箱を胸にかかえ三女の私を背負い、次女の手を引いて、ようやく日本の土を踏めたようです。

父は満鉄に勤めたのが幸いしてか無事に帰国して来ましたが、長沼はすでに自分の農地もなく、長男のところで農業の手伝いをしていましたが、何人もの子供を亡くして打ちひしがれている母シナノと相談し、別な土地で出直そうと札幌の隣接地豊平町澄川で、農業をしながら乳牛も飼っていた南雲二郎(父の兄の友人)に土地を借り移り住んで農業を始めた。間もなく近くの国の土地を払下げてもらい丸太小屋を建て、ようやく

く自分達の土地と家を持つことができた。

昭和二十三年四月に男の子が生まれ、新しい生活を作りはじめた時なので新作と名づけた。その頃満鉄時代の白井三好が尋ねてやって来ました。

父は開拓にかけている少しの土地を貸し小屋を建て住ませた。木を切り倒し、根は火をつけて灰にし少しずつ、少しずつ、荒地を畠にと変えて行った。

イモやトウキビ、大豆と秋には札幌の平岸の方へリヤカーで売りに行った。

昭和二十四年六月二十六日三女の私の小学一年の運動会の日であった。父はカボチャの種を植える畑を耕さねば遅くなると一人残って農作業をしていた。

白井家も八十三歳のおちいさんを一人残して皆で運動会を見に行った。その頃真駒内駐屯の若い米兵が銃をいたずらして乱射しながら歩いていたから気をつけるようにと、運動会の帰り道、南雲二郎が知らせてくれた。

私はこの日のことを今だに忘れない。女子供は南雲家から野ら着を借りて男のような服装をして帰ったら

家と物置小屋の間に父はうつ伏せに倒れていた。きつと昼どき家に戻って来たところを後ろから射たれたようだ。家の中は荒されていた。

若い米兵が奪って行くようなものは何一ツとして無かったのに、父は解剖されて背中から大動脈、肺まで達していた弾丸を摘出された。

犯人の若い米兵は、山の中をウロ／＼しているところを間もなく逮捕された。

暗くなつてから米軍のMPとかいう憲兵が三、四人来た。新作を背負いランプの下でMPに向つて大声で怒鳴っている母を見た時私は母が狂ってしまったと思つた。

父が殺された。そのせいで母が狂つた。七歳の私には父の死の恐ろしさより、母が狂ってしまった恐ろしさの方が強くて、その夜は姉と二人臼井家に泊めてもらった。

母の両親が長沼から来てくれて一緒に生活した、母は女だからと馬鹿にされたくない、がむしやらに生きていたようだった。

南雲家には何ほど支えになって貰ったことか、洞爺丸の沈んだ台風の時小屋の屋根が吹き飛ばされ、修理のため母が屋根に上つて、風にあおられて落ちてしまった。

それが原因か、体調がおもわしくなく農作業が辛くなつていた。

母の両親も老年になり、長沼の家に戻り、昭和三十五年秋父の兄正雄のすゝめで人手もなく農家も大変だし土地を売ってアパート業に職業を変え、新作の成長を楽しみにしていました。私も着物を縫つたり、和裁を教えたりして暮しを助けてきました。

昭和四十九年十月頼りにしていた一人残つた息子新作が劇症肝炎で、あつという間に亡くなつてしまいました。どこまでも不運が続くのか！

その後の母は満州のことも、夫のことも、満州で亡くした子供達のこと話さなくなり、髪は一夜にして真白になり、この世で楽しいことなどあるものかという顔だちに変つてしまいました。

そうして三女の私達と建替えた家に同居して間もな

く、平成二年十二月二十六日奇しくも引揚者に対する感謝状が決まったことが新聞に報道された日の朝、七十八歳で静かに、やすらかに、息を引取ったのでした。母シナノの一生の労苦を省みる時、なにか形のあるものを残して、あの労苦を後世に言い伝えたいと思ひ、当時三歳の私が母から聞いたことやその後の様子を書いたものです。

## NHKで孤児となった妹が判明、

### 永住帰国に

福島県 上遠野 香

私は昭和十六年六月、まだなんの分別もつかない六歳の時、両親と弟妹の五人で満州の東安市に渡航した。父は興農合作社に勤務し、その間妹二人が産まれたが、父は昭和十八年四月、現地召集となり、出征した。

母は幼い子供四人を養育するため、父の勤務していた会社の雑役婦として、一生懸命に身を粉にして働き

づくめであったが、妹は栄養失調で昭和十七年死亡した。

昭和二十年八月、ソ連軍の参戦で、私達母子四人は、八月十日、命令で避難するため、東安駅で列車に乗ったが、この駅で移動中の日本軍の爆弾が破裂し、列車もろとも避難民約七百人が死傷した事故に巻き込まれてしまった。どうして爆発が起きたのかは不明である、あとからはソ連軍が進攻して来る、その悲惨な状況は、どのように表現して良いか、その場にいた者でなければ実感として理解できないような阿鼻叫喚の巷と化した。母と弟、妹は爆死してしまい、私と一番上の妹光子が難を逃がれたが、母や弟妹の遺体の確認や、埋葬などする暇もなく、ソ連軍からの危害を避けるべく、妹の手を引き、日本軍と一緒に山中に逃亡した。

私が十歳、妹は八歳だったので、敗走する軍隊と同じ速度で歩くことはとうてい不可能であった。私は妹の手をしっかり握り、遅れないよう懸命に努力したが、道もない険しい山の中の行進と、しとんと雨が降ってきて、食糧もなく、空腹続きであったので、妹